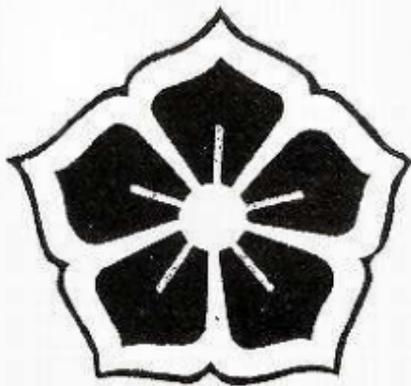
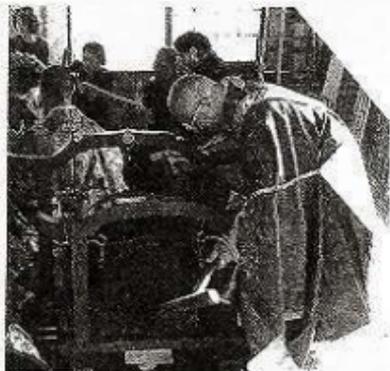


# 双盤念佛



円仁 (高僧像)



双盤念佛 向い合わせた双盤を叩く

## 双盤念佛について

西野昭三

新久観音双盤念佛の会が、創立 20 周年を迎えるにあたり双盤念佛の起源について調べてみた。

双盤念佛とは双盤といわれる 2 枚の銅鑼鍾のような鍾を叩きながら引声といわれる念佛を唱える念佛のことを言います。この双盤念佛には主に浄土宗寺院で法要のときに僧侶によって唱えられるものと、在家の人が寺堂で唱えるものがあります。在家の民間の人の唱える双盤念佛は薬師・観音・閻魔堂などで唱えるものが多く、宗派も浄土宗以外の寺堂にまで広まっています。相互に関係していると思われませんが、僧侶が唱えるものは原則として 2 枚の双盤で叩きますが、民間の在家の方のたたくのは、4 枚から多い所では 10 枚の鍾の所もあり、関西では鉦鑼の名で一般化しています。この在家の双盤は僧侶の行う法要の一部に組み入れて行われることが多いのです。僧侶の唱えるものは、全国の浄土宗寺院に分布するといつてよいのですが、関西、とくに滋賀県と和歌山県、関東の神奈川県に集中します。また浄土宗の中でも名越派といわれた一派に独自の双盤の叩き方があって、東北地方から北海道に名越派の念佛として残っています。また九州北部にも古い鉦があり、かつては広く分布していたと思われます。一方民間双盤で現在残っているのは神奈川を中心とする関東南部、及び関西では滋賀県に集中していますが、一ヶ所飛んで鳥取市の極岸寺に残っています。かつてはかなりの浄土宗の寺院で僧侶ともに唱える双盤念佛があったと思われますが、大東亜戦争中の金物供出によって廃絶してしまった所が多かったと聞きました。

双盤念佛は、京都の真如堂で行われていた「引声念佛」がもとだと言われている。引声念佛は比叡山延暦寺の僧・円仁が入唐の折、唐の五台山の法道和尚から学んで我が国に伝えたとされている。引声念佛は、唐の時代の発音のために極めて難解なものであり、引声は、五台山を洗う波音をリズム化したものだとも言われている。

15 世紀前半に、京都の真如堂で、十日十夜の「口称不断念佛」が行われて、明応五年(1496)鎌倉の光明寺の僧祐崇が、真如堂の大衆とともに、宮中で引声念佛を修した。この『引声念佛』を、後土御門天皇の勅許を得て、鎌倉の光明寺に移修したのが双盤念佛の始まりで、その頃から民間に広まり、双盤念佛として定着したと言われている。

鎌倉の大本山・光明寺に伝わる双盤念佛の平鉦には「正徳 3 年」(1713)、雲坂

には「寛政七年」(1795)の銘の刻印があり、300年近い伝統が引き継がれている。この双盤鉦は浄土宗寺院で十夜法要と言う回向を行う時に、引声念佛を唱えるための伴奏として使われる打楽器である。太鼓一人・平鉦四人が組になり、太鼓打ちが音頭を取り鉦張り四人とともに、調子に合わせて引声念佛を合唱する。引声念佛とは、お経や念佛の「ナミアミダブツ」に長い節をつけて唱える方法で、音調は、木遣節に似ている。音声を伸ばして唱えるのがコツだと言われている。

「十夜法要」とは、御佛や御先祖様に秋の総りを供え報恩感謝を表す浄土宗独自の法要である。念佛は空也と言う平安時代の僧や1遍上人と言われた鎌倉時代の僧が、「ナミアミダブツ」と唱えることで極楽往生を願うという浄土教を広めた事、その時に、念佛を唱えるだけでなく、鉦や太鼓などを鳴らしながら踊りだした事、この浄土教が盛んであった頃生きていて、そういう人達と交わりを結び柔軟に対応した人の中に、真言宗中興の人と言われる覚鑿(興教大師)もいたと言う事などから、真言宗の寺院であっても、鎌倉時代か室町時代には、双盤念佛や念佛講の形で念佛を取り入れることが試みられたのではないかと想像される。

新久の龍園寺、中興の人と言われる第七世・俊普が亡くなったのが、宝永六年(1709)その前後の数十年間は、不自然ではなく住職が継続している事、第拾宅世・戒光が願主となった護摩壇が残っていた事などから、当時も護摩修行が行われていたと考えられる。又双盤念佛が、観音様のお祭りで、護摩修行と合わせて行われる事などを考え合わせると、この頃には、すでに双盤念佛がおこなわれていたと思われる。

新久千手観音堂改築に伴い、双盤念佛に使う太鼓を平成19年10月17日に東京浅草の宮本宇之助商店に張り替えに行った折、胸中の墨書きが「五丙申年」と読めた事から、安永五年(1776)に違ったか張り替えたかしたと考えられる。張り替えであるとする、更に6・70年は遡ることになる。以上のことから推察すると、新久では、安永五年(1776)頃には、双盤念佛が行われていたと見てよいだろう。

龍園寺の往昔の梵鐘と双盤鉦は、昭和19年に戦時金物供出されて残されていない。双盤念佛も一時中止せざるをえなかった。その復活をみたのは、平成4年11月23日、新久千手観音双盤念佛の会を設立した事に始まる。

光明寺のホームページによると、昔、正覚寺の檀徒は、青年に達するとこの鉦講中に入り、正徳元年(1710)頃には、久良岐群随一の講中となり、当時の舞岡の師匠の指導が良かったためか、和泉、舞岡、湊谷(共に戸塚宿)から大勢の若衆が集まり、その腕を競い合ったと言う。その頃、正覚寺の十夜法要は、二夜三日

(ニヤサンニチ) 行われ、夜の雑魚寝や丁半を楽しんだようであるが、良烟のないこの地域では、菜ゲンチンと言う菜っ葉、豆腐、油揚げの名物汁を出すのが伝統で、夜になると、昼間の握り飯をこの汁に混ぜて、オジヤ(お十夜)を作って寒さをしのいだと言われている。この菜ゲンチンは、現在でも当寺の名物である。

鎌倉の光明寺では、10月12日～15日まで十夜法要が行われる。昼過ぎの日中法要も、盛大に舉行される。山門では双盤念佛、大殿では引声念佛と鉦供養を聞く事が出来る。露天も多教出展するので賑やかである。

#### (参考)

※ 大本山光明寺所在地、神奈川県鎌倉市材木座 6-17-19

※ 円仁について

円仁は、延暦13年(794)下野群賀(栃木)の生まれ。延暦21年、9歳で出家し下野の大慈寺の門にはいり、大同4年(809)15歳で比叡山に登り、最澄に師事、承和2年(835)入唐の船を受けて、承和5年(838)入唐、揚州開元寺の宗叡から梵学を、全雅から密教を学び、承和6年(839)に帰途についたが、途中で暴風に合い登州に漂着した。青洲を見学し、五台山の巡礼の折、五台山法道和尚から、引声念佛を学び、ついでに、長安(現在の西安)まで足をのぼして、長安大興善寺の元政、青龍寺の義真から、密教や悉曇、金台蘇の大法を学び、宗頤から止観を学んだ。

承和12年(846)皇帝武宗の佛教弾圧を受けて承和14年(847)に帰国した。

帰国後は、宮中での受戒師を務めたり、最澄の遺業を継承して東塔に前唐院、横川に根本親音堂を創建し、また法華総寺院を開いて天台密教の確立に努めた。仁寿4年(854)天台座主3世となる。貞観6年(864)に70歳で没した。後に慈覚大師の称号を戴く。

#### ◎ 参考資料

新久観音と龍圖寺・大和市史研究28号・仏教民族辞典・日本仏教大辞典

総合仏教大辞典・大本山光明寺ホームページ

龍岳山歡喜院龍圓寺

新久千手觀世音双盤念佛

新久觀音双盤念佛の会

## 双盤念佛について

双盤念佛は、比叡山常行堂に伝えられた「引声念仏」、がもとどと言われている。これが、15世紀には、京都真如堂や鎌倉の光明寺で行われるようになり、そこから民間に広まり双盤念佛として定着したと言われている。

念仏については、空也と言う平安時代の僧や一遍上人と言われた鎌倉時代の僧が「ナムアミダブツ」と唱える事で極楽往生を願うという浄土教を広めた事、その時にただ念仏を唱えるだけでなく鉦や太鼓などを鳴らしながら踊りだした事。この浄土教が、盛んであった頃生きていて、そういう人達と交わりを結び柔軟に対応した人の中に、真言宗中興の人と言われる覚鑿（興教大師）もいたという事から、真言宗の寺院であっても、鎌倉時代か室町時代には、双盤念仏や念仏講の形で念仏を取り入れることが試みられたのではないかと想像される。

龍園寺の中興の人と言われる第七世俊誓が亡くなったのが宝永6年(1709)で、その前後数十年間は不自然ではなく住職が継続している事、第拾老世戒光が願主となった護摩壇が残っている事などから、当ても護摩修行が行われていたと考えられる。双盤念佛が観音様のお祭りで護摩修行と合わせて行われる事などを考え合わせると、この頃には双盤念佛が行われていたと思われる。

新久千手観音堂の改築に伴い、観音堂にある双盤念佛の時に使う、大太鼓を、平成19年10月17日、東京浅草の宮本宇之助商店に張替に行った折、胴内の墨書が「五丙申年」と読めることから、安永五年(1776)に、作ったか張替をしたと思われる。最初に書いたと思われる墨書の上に和紙を貼って、「昭和七年七月十八日張替、太鼓師、入間郡名細村小堤、三芳伝造、尺八、尺五、二個代金、四拾圓也、社寺総代、丸山慶次郎、西野徳次郎、吉野辰平、田中甚藤、黒木武助」とあった。他の墨書には、年号がなく、ただ「江戸浅草新町丸山三左衛門重好」とあった。

今回、胴内に「平成19年10月吉日、両面張替、東京浅草宮本宇之助商店、社寺

結代、岡野勇一」と記した。安永5年に作ったとしても231年たつが、張替だとすると6、70年は遡ることになる。

宮寺の西久保観音堂にある鉦はりの大太鼓には、天保3年(1832)の記念の銘がある。また根岸の子有地蔵堂にある双盤鉦の銘には、「干時弘化四丁末年如月(1847年2月)求之、武州入間郡上根岸村惣村若者中」とある。西三ツ木(現みつぎ台公園内)にあった、馬頭観世音堂の双盤鉦(入間市博物館寄託)の銘を見ると「武州入間郡桂ノ庄金子三木村、奉納馬頭観世音堂什物、江戸大傳馬町花町目辰己屋市村姓、願主、新兵衛、嘉永二己酉年正月初午(1849)江戸西村泉守作」とあった。

鎌倉にある大本山光明寺のホームページで双盤念仏を見ると、「當寺に伝わる双盤の平鉦には、正徳3年(1713)、雲板には寛政7年の銘の刻印がある事からも、300年近い伝統が連続として引き継がれている訳である。」とあった。

以上のことから推察すると、新久では、安永5年(1776)頃には双盤念仏が行われていたと見てよいであろう。

## 新久観音双盤念仏の復活

龍園寺の梵鐘と観音堂にあった双盤鉦は、昭和19年初夏の頃、戦時金物供出で、召集令状により出征した。その時には、鐘に紅白の布で褌を掛けて、荷車に積んで、天王様が廻るように、木遣で村中を廻ってから集合所(現在の小谷田バス停)まで送っていったと言われている。それ以来、双盤念仏が途絶えて約50年近くたった頃、龍園寺の平成記念事業として新墓地並びに観音堂周辺整備事業が行われた際、双盤念仏復活の声があがり、平成4年1月15日の新久千手観音例大祭に、宮寺の西久保観音鉦はり保存会の皆様に鉦はりの演奏を奉納して戴いたのを切っ掛けに、復活の声が、一層高まった。

その後、西野昭三氏が西久保鉦はり保存会にお願ひに行き、平成4年5月24日に新久会館に黒米要作、黒米徳三、寺本仙吉、金子俊雄、松下雄亮の各氏が集まり、

西野氏より説明があつて、「取り敢えずやってみる。出来なければいつでも止める」ということで双盤念佛研究会を発足し西久保鉦はり保存会の指導を受けることになった。練習予定は、6月31日から7日間であつたが、保存会の都合により6月2日から1日おきに8日間指導を受け、その間は新久観音堂で復習した。6月16日に練習用の双盤鉦を根岸子育地蔵尊保存会から、鉦の杵を西久保鉦はり保存会から借り、翌日から本格的に練習を始めた。

8月16日新久千手観音夏祭には、西久保鉦はり保存会から鉦と杵を借り受けてお祭りを済ませた。翌日の17日には、西久保観音の縁日に招待され双盤念佛を演奏し奉納した。

その帰り、社寺総代会長の森田富衛さん宅にお礼と報告に寄つた際に、鉦を作ろうと考えているので作ってくれる所を調べるように言われ、寺の取引の仏具店を始め各方面に問い合わせてみたが扱っていない。たまたま、雑子の抱を買いに寄つた浅草の宮本宇之助商店で歌舞伎で使う双盤鉦を扱っている、どんな大きさでも出来るのとこのだったので、西久保観音と同じ形にと、黒米要作氏が製図を書いて社寺総代が注文した。杵は指物師の丸山理一氏に依頼した。

鉦を作って貰う以上、双盤念佛を止めることは出来ない、指導を受けた6名が発起人となり、代表黒米要作氏の名で会員募集をすることになった。各区の区長さんに募集の回覧を依頼した処、10名の希望者があつた。10月中旬には鉦と杵が出来上がり、吊り紐は五色にして開眼を待つばかりとなり、練習を重ねました。

平成4年11月23日午後2時、新久千手観音堂において双盤鉦の開眼供養が行われ、その後に関設総会が行われて正式に新久観音双盤念佛の会が発足しました。練習中に一人減り二人減り、12名で発足しました。